太宰府人物志

資料室だより㊺

征西将軍宮懐良親王の動向

懐良親王は、建武新政で著名な後醍醐天皇の皇子で、南北朝時代に九州南朝方の中心として活躍した人物です。

後醍醐天皇は1336年10月、足利尊氏と和睦しますが、この時諸皇子を各地に派遣し再挙を図りました。九州へは1338年、幼年の懐良親王が征西将軍として従者とともに下向することになります。しかし、当時九州は北朝方の勢力が強く、上陸は容易ではありませんでした。そのため、伊予忽那島で数年を過ごした後、南九州に上陸して北上することを企図します。1342年5月、懐良親王は薩州津に上陸して薩摩谷山城に入城し、ようやく九州経営の足がかりを得ることに成功しました。

その後、1348年には菊池武光（平成21年11月1日号参照）の本城である菊池城に移り、ここを拠点として九州経営を進めます。そして1353年2月の針摺原の戦いで一色道猷を、1359年8月の大保原の戦いで少弐頼尚を破るなどして、ついには1361年8月、念願の大宰府入りを果たすことに成功します。

懐良親王が九州入りして実に二十年弱を経過してのことでした。

征西府が大宰府に置かれた大宰府征西府時代と呼ばれるこの時期、全国的に南朝勢力が衰退していく中で、九州だけは全盛期を迎えます。この頃北朝方として九州探題に任命された斯波氏経は、豊後で1年強過ごした後、成果を挙げることなく帰京しますし、次に九州探題に任命された渋川義行は、そもそも九州入りすることもできずに解任されたほどでした。また懐良親王が明国から日本を代表する機関として倭寇禁圧の要請を受けたのもこの頃です。

しかし、次の九州探題である今川了俊の出現により、この九州南朝の全盛期にも終止符が打たれました。了俊の周到な戦略の下1372年8月に大宰府を追われた懐良親王は、筑後高良山へ、さらに肥後菊池へと後退しました。九州南朝勢力は急速に力を無くし、懐良親王は1374年頃、後征西将軍宮（後村上天皇皇子良成親王カ）に職を譲り、1383年3月、隠棲先の筑後矢部において死去したとされます。

市史資料室　朱雀　信城